TSUNAGU

［繋ぐ］

Vol. 66
2026 SPRING

彩る Special Issue:

心が動いた瞬間を収めた光の揺らぎを描く切り絵

深める

KPPグループホールディングスが
資源循環ネットワークを拡充

先どる

メモ帳から紙の彫刻アートが姿を現す
「OMOSHIROI BLOCK」

心が動いた瞬間を収めた光の揺らぎを描く切り絵

一枚の黒い紙と刃先の尖ったデザインナイフ一本で自らの表現を追求し続ける切り絵作家、斉藤洋樹さん。春光を纏って咲く桜や水面に揺れる光の粒といった日常の情景を、繊細な線と重なり合うレイヤーで描き出すその作品は、見慣れた景色の中にある特別な瞬間をすくい上げるような不思議な魅力にあふれています。紙という素材の特性を活かし、繊細な技術によって、光を捉える独自の作品を発表し続ける斉藤さんに、創作の原点と未来への想いをうかがいました。

TSUNAGU

TSUNAGU 2026 Spring

KPPグループホールディングスが発行するTSUNAGU（繋ぐ）は“紙の魅力再発見”をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

彩る …… P01
心が動いた瞬間を収めた光の揺らぎを描く切り絵

深める …… P06
KPPが資源循環ネットワークを拡充／国際紙パルプ商事が企業サイトを刷新

先どる …… P09
メモ帳から紙の彫刻アートが姿を現す「OMOSHIROI BLOCK」

伝える …… P11
革新を楽しむ実務家から届いた懐旧の情を誘う手紙

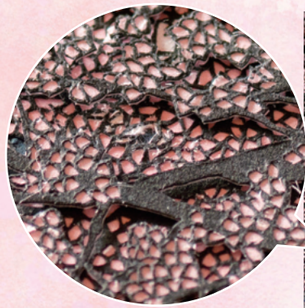
拓く …… P13
紙製人工芝「ペーパーターフ®」の屋外向け新商品が販売開始

紐解く …… P15
次号より紙と文化を紐解く新企画「紙の綴（つづり）」がスタート

作る …… 付録
ころんと起き上がる「シマエナガ」の起き上がり小法師

『君の片隅に』（2022年）

切り絵にして描くことで、いつもの見慣れた景色が記憶の奥にある美しい情景と重なる。

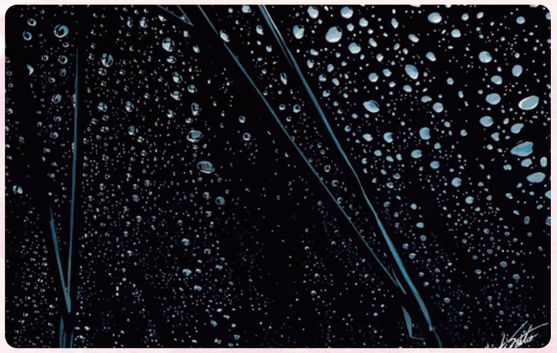


3枚の切り絵を重ねることで作品の奥行きを演出。切り抜いた部分の裏側に、ポスターカラーで着色した和紙を貼ることで繊細な色彩を表現している。

山の気配と街の息づかいが重なり合う、静かな美しさを湛えた街・長野市。作家・斉藤洋樹さんの切り絵には、彼が生まれ育ったこの街の澄んだ空気のような透明感と山影が落とす柔らかな陰影、山々に降り注ぐ朝の光のような眩さが溶け合う叙情的な美しさがあります。

「日常の中で、ふといつもの景色が美しく見える瞬間があるんです」。その言葉どおり、斉藤さんが作品のモチーフに選ぶのは、特別な名所ではなく都会の片隅で咲く桜や川沿いのビル群、時には雨粒のついたビニール傘といった何気ない日常の断片が大半。実在する風景をモデルにするゆえに、いつもの暮らしの中にも美しさがあることを再認識させられます。

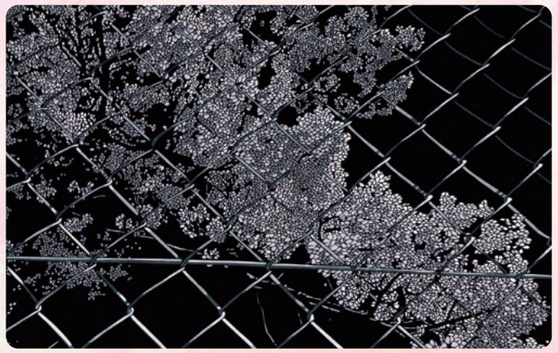
斉藤さんの心象を表したような作品はＳＮＳに公開するたびに拡散され、テレビなどのメディアでも多く取り上げられたことで幅広い層からの人気を獲得。東京都内や地元・長野県での展示会は好評を博し、ますます注目度が高まっています。



『言ってしまったら戻れなくなる』（2025年）
墨と透明水彩などで着色した和紙を貼り、色彩の細かな違いによって雨粒の質感を表現した。

『蛍になれる場所』（2025年）
川沿いの遊歩道から見える橋梁と光の揺らぐ水面をモチーフにした作品。裏側から墨と透明水彩などで着色した和紙を貼付した。

『きみと出会った後の世界』（2023年）
背景の星空は、ポスターカラーで描いた後、歯ブラシに絵具を付けて吹き付けた。



『届かない場所』（2024年）
金網の質感や細かな明暗を出すために、あえて輪郭線は残さずに着色した。

何層もの細い線によって描かれた、花火をモチーフにした切り絵。裏面に着色した紙を何層にも貼り重ねることで、夜空に鮮やかな色が放射状に広がる。

全体的な明暗を確認し、桜の花びらの「光の当たりが少ない奥になる部分」からカットと着色を進めていく。切り抜いた細かい点によって、点描画のような繊細な陰影や質感を表現している。右は下絵を外した切り絵用紙で、作品の背景となる。

斉藤さんの作品づくりは、まず日常生活や旅先で心惹かれた風景を写真に収めることから始まります。「普段の散歩や一人旅に出た時に、美しいと思える瞬間を写真に収めるようにしています。それに、電線や信号機、フェンスなど、緻密なゆえに"切り絵のしがいがある"構図は、意識的にストックするようにしています」。

モチーフにする写真が決まると、まずコピー用紙に印刷。それをデザインナイフの刃が入りやすい切り絵用の黒い紙（「ｄｏＡｒｔ．濃黒切り絵用紙・極」発売元：カワチ画材）の上に重ね、仮留めした状態で重ね切りしていきます。"切り絵"は、紙をハサミやカッターで切り抜き、台紙に貼るなどして人物や動物、風景などを表現する絵画技法の一つです。一般的には、強度を保つために線を太く残すものですが、斉藤さんの作品は電柱のワイヤーや植物の葉先などを驚くほど細くカット。限界まで細切りした0.1ミリほどの極細ラインを維持しながら、作品全体のバランスを取っています。長時間にわたって緻密な作業を繰り返すため、集中力を維持する秘訣を聞くと、「たしかに細かい作業ではありますが、始めと終わりの時間、休憩時間を決めて進めているので、あまり苦に感じていません」と斉藤さん。その作業を眺めていると、写真の輪郭をそのままなぞるのではなく、影になっている部分や光を通したい部分を見極めながら、デザインナイフで丁寧に切っていることに気付きます。「僕の作品は、1枚の黒い紙を切って終わりというものではなく、切り抜いた部分と同じ形のパーツを別の紙に用意し、着色したうえで裏から貼り付けていきます。着色した和紙や水彩紙などの紙素材を重ねていくことで、

色の濃淡や光の透け具合を調整しています。今はあえて輪郭線をなくす表現方法を取り入れたり、光が丸くぼけて浮かび上がる"玉ボケ"のような表現など、新たな試みにも挑戦しています」。斉藤さんは光の透過率が異なる紙素材を巧みに組み合わせることで、複雑な色のグラデーションや水面の揺らぎのような繊細な表現を可能にし、単なる"精密な模写"を超えた芸術作品に仕上げているのです。

また、制作に使う道具は、基本的にデザインナイフ一本のみ。刃の種類も長年同じものを使い続けているといいます。「細かな接合の際にピンセットを使うこともありますが、制作のほとんどはデザインナイフだけで行います。シンプルな道具だからこそ、自分の線がそのまま出ると思っています」。

斉藤さんが切り絵に出会ったのは、高校時代のこと。地域の人と一緒に学ぶ特別授業で切り絵を体験し、感銘を受けたそうです。「紙にナイフを入れた瞬間に、自分はこれだなっていう衝撃がありました」と斉藤さん。その後、美術の道を志した時期もありましたが、スランプを経験したこともあり断念。スポーツトレーナーを養成する専門学校へ進学したものの、企業研修を重ねるうちに自分の将来に対する違和感が募っていったそうです。「このまま進めば安定した生活を送れることはわかっていましたが、将来の自分の姿が想像できなかったんです。結果として、卒業直前に内定を辞退。家族が"自分で決めた道を進めばいいよ"と背中を押してくれたこと、周りの人たちが"プロになりなよ"と言ってくれたことが支えになり、切り絵作家として生きる道を選びました」。

『消えていったひとりごと』（2025年）
木々の細かな明暗を表現するために、着色した何色もの和紙を裏から貼り付けた。

その後、アルバイトと並行して作品づくりを続け、2014年に初の作品展を開催。それを機に本格的な作家活動を開始し、全国各地で個展やグループ展を重ねてきました。「切り絵には写真では伝わりきらない魅力があります。その立体感や奥行き、紙の質感は、実際に観ないとわからないものですし、光の当たり方や距離によって作品の印象が変わります。ぜひ実物を見ていただき、切り絵には幅広い表現方法と奥深い魅力があることを知ってほしいですね」。

紙を切るというシンプルな創作の中に、時間や感情、記憶が折り重なる斉藤さんの作品。その表現の幅はこれからも広がり続けていくに違いありません。

PROFILE

斉藤洋樹（さいとう ひろき）さん
切り絵作家

@kirie_hiro　@kiriehiro

1993年長野県生まれ。高校時代に切り絵と出会い、独学で独自の彩色技法を確立。2014年より作家活動を開始。緻密で幻想的な風景作品がSNSを中心に話題を呼び、テレビや雑誌などメディアでも多数取り上げられる。銀座蔦屋書店での個展「旅の案内人」をはじめ、全国各地で展示会を開催。2019年長野県工芸美術展奨励賞受賞。

「HALO! claiz グループ展Halo world vol.3」

会期　：2026年9月18日（金）～20日（日）
会場　：デザインフェスタギャラリーEAST 2F
（東京都渋谷区神宮前3丁目20-2）
入場料：無料

「切り絵作家斉藤洋樹個展 -約束の場所-」

会期：　2026年12月18日（金）～21日（月）
会場：　デザインフェスタギャラリーEAST 2F
（東京都渋谷区神宮前3丁目20-2）
入場料：無料

ONLINE SHOP
https://hiroki-saito.booth.pm/

香水柄の切り絵を印刷した
アクリルキーホルダー。
※サイズ約50mm。

深める　KPPグループの最新ニュースをキャッチアップ「KPP GROUP HEADLINE」

KPPグループホールディングスが資源循環ネットワークを拡充

KPPグループホールディングスは「循環型社会の実現に貢献する」というグループミッションのもと、事業基盤の強化と再資源化ネットワークの拡充に向けた取り組みを進めています。このたび、同ミッションの実現に向けた新たなアクションとして、廃棄物燃料化事業・廃棄物処分業（中間処理）への本格参入およびグループ内再資源化ネットワークの最適化に関する2つの施策をお知らせします。

KPPグループは、紙の総合商社として培ってきたネットワークとノウハウを活かしながら、再資源化事業の拡大とGX（グリーントラストフォーメーション）の推進を通じて、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを加速してまいります。

ACT 01

廃棄物燃料化事業・廃棄物処分業（中間処理）への本格参入に向けて「シナネンエコワーク株式会社」の全株式取得

国際紙パルプ商事株式会社は、シナネンホールディングス株式会社との間で、シナネンエコワーク株式会社の全株式を取得する契約を締結しました。

事業取得の背景

シナネンエコワークは、千葉県および埼玉県に廃棄物中間処理施設を保有し、木くずリサイクルやバイオマス燃料（木質系チップ）の製造販売を行う企業です。同社が持つ再資源化ネットワークは、KPPグループが推進するGX事業との親和性が高く、循環型社会の実現に向けた基盤となります。

戦略的意義

本株式取得は、KPPグループが廃棄物の燃料化・中間処理事業へ本格参入するための重要なステップです。既存の古紙リサイクル事業に加え、資源循環の領域をさらに拡大します。

今後の展望

2026年3月2日に株式取得を完了し、社名を「KPPエコワークス株式会社」へ変更しました。既存事業とのシナジーを最大化し、企業価値のさらなる向上を目指します。

KPP ECOWORKS CO.,LTD.

詳しくはこちらをチェック!

名称	KPPエコワークス株式会社
本社	東京都中央区明石町6番24号
事業内容	産業廃棄物処分業／一般廃棄物処分業／産業廃棄物処理サポート事業
事業所	広域営業オフィス 千葉県松戸市本町18番地4 NBF松戸ビル8階 千葉リサイクルセンター 千葉県千葉市美浜区新港223-9 白岡リサイクルセンター 埼玉県白岡市下大崎888

ACT 02

再資源化ネットワークの最適化を目的として孫会社（むさし野紙業とグリーン山愛）を合併

国際紙パルプ商事の子会社（当社孫会社）である、むさし野紙業株式会社と株式会社グリーン山愛は、再資源化ネットワークの強化を目的に、2026年4月1日付で合併しました。

期待される効果

町田・相模原・厚木エリアにおける回収業務の機動力向上と、営業体制の一体化による集荷力の強化、さらに管理コスト削減をはじめとする業務効率化を同時に進めることで地域に根ざした回収体制を一層強化し、安定した再資源化サービスの提供につなげていきます。

取り扱い品目の拡大

古紙に加え、アルミ缶・PETボトルなどの再資源化物の取り扱いを拡大し、さらに処理が難しい「難処理古紙」の回収強化にも取り組みます。多様な資源を循環させる体制を整えることで、KPPグループのミッションである循環型社会の実現に貢献します。

合併の概要

むさし野紙業株式会社を存続会社、株式会社グリーン山愛を消滅会社とする吸収合併方式で、合併後はグリーン山愛の拠点を、むさし野紙業の町田営業所として統合します。

musashino

詳しくはこちらをチェック!

名称	むさし野紙業株式会社
本社	埼玉県川越市大字下広谷404番地1
事業内容	古紙の集荷・選別・加工及び販売 専ら物（古紙・古布・空き缶・空き瓶）を対象とした、収集及び運搬
事業所	川越営業所／ふじみ野営業所／和光営業所／西多摩営業所／北多摩営業所／新木場営業所／横浜営業所／厚木営業所／町田営業所

KPP GROUP HEADLINE

「KPP総合展示会」を6年ぶりに開催し、600名を超えるお客様にご来場いただきました

国際紙パルプ商事株式会社は昨年12月8日・9日の2日間、本社にて6年ぶりとなる「第8回KPP総合展示会」を開催し、600名を超えるお取引先様にご来場いただきました。今回のテーマは「紙の可能性と持続可能な未来の共創」。当社の長期経営ビジョン「GIFT 2030」が描く未来を具体的に示す場として、多様な展示と提案を行いました。

会場では、「グラフィック（用紙）」「パッケージング」「ビジュアルコミュニケーション」「リサイクリング」「機能材・スタートアップ」の5領域を軸に最新の商品やソリューションを紹介。各部門の担当者が来場者の方へ紙の新たな価値や活用の可能性をご説明しました。また、会期中には業界の第一線で活躍する専門家を講師に迎えたセミナーを計6回実施。市場動向を踏まえつつ、紙が担う未来の役割について活発な議論が行われました。

KPPグループは今後も、社会課題の解決に資する商品ラインナップの拡充と提案力の強化に取り組み、持続可能な社会の実現に向けて挑戦を続けてまいります。

受付エリア

機能材・スタートアップ領域

グラフィック（用紙）領域

リサイクリング領域

パッケージング領域

ビジュアルコミュニケーション領域

国際紙パルプ商事のコーポレートサイトがリニューアルオープンしました

情報発信の起点である国際紙パルプ商事のコーポレートサイトが、2026年2月に大きく生まれ変わりました。今回のリニューアルは、単なるデザイン変更ではなく、「情報の探しやすさ」と「当社の『今』を等身大に伝える力」を高めることを目的に、2024年の創立100周年を経て次のステージへ向かう私たちの姿勢を明確に示していくための取り組みです。紙の可能性を追求し、新たな価値を創出していくという想いをデジタルの場でどう表現するか、議論を重ねながら形にしました。新しいコーポレートサイトが、社員やお取引先様をはじめとするステークホルダーとKPPグループをつなぐ新たな架け橋となり、より深い理解と信頼を育む場として機能することを願っています。ぜひ一度アクセスいただき、私たちの新たな発信をご覧ください。

［PC版］トップページ

［モバイル版］トップページ

企業・事業紹介ページでは、地球儀が回るアニメーションを採用

POINT 01 情報構造とデザインを刷新し、各デバイスで快適に閲覧できるサイトへ

旧サイトでは、階層の深さから目的のページにたどり着くまでに時間がかかることが課題でした。

そこで新サイトでは情報構造を抜本的に見直し、膨大な商品群をスムーズに把握できる一覧性の高いレイアウトを実現しました。あわせてスマートフォン対応のデザインを導入。どの端末でもプルダウンメニュー等を通じて直感的に詳細を確認できるよう改善し、利便性と視認性を両立させています。

［PC版］取扱商品ページ

［モバイル版］
取扱商品ページ

POINT 02 社員一人ひとりが取り組むサステナビリティ活動を公開

「KPP社員のサステナブル活動」ページは、社員が日々の業務や暮らしの中で実践しているサステナビリティの取り組みを自ら紹介するコンテンツです。「循環型社会の実現」というミッションが一人ひとりの小さな工夫の積み重ねによって形づくられていることを、親しみやすいイラストや写真とともにご紹介しています。

KPP社員のサステナブル活動ページ

POINT 03 各種ニュースページのユーザビリティが向上

環境配慮型ビジネスを紹介する「Green KPP」ページは、新たに「Green KPP News」コーナーを設け、情報をニュース形式で整理しました。情報の探しやすさと発信力を向上させています。また、トップページのニュースでは、タブを切り替えて「国際紙パルプ商事」と「KPPグループホールディングス」それぞれの情報をご覧いただける仕様に変更しています。

Green KPP Newsページ

［モバイル版］
トップページ Newsページ

EDGE of PAPER

使い終えると「紙の彫刻」が完成する 想い出と時間をカタチに刻むメモパッド

メモを抜き取るたびに思わず息をのむ“造形”が姿を現す、新しい体験型プロダクト。建築模型づくりで培われた精密なレーザー加工技術と遊び心、紙という素材への深い探究心から生まれたのが、この「OMOSHIROI BLOCK」です。メモを使い終えると現れるのは、名建築やアートピース、日常の風景など、細部までこだわり抜かれた立体造形。一枚一枚をめくる行為そのものが驚きと発見に変わるプロダクトデザインの魅力について、株式会社トライアードの代表取締役社長 堀口英人さんにお話をうかがいました。

We Design -OMOSHIROI- TRIAD

株式会社トライアード

大阪市西淀川区に本社を置き、建築模型制作からプロダクト・グラフィック・Webデザインまで幅広く手がけるクリエイティブ企業。自社ブランド「OMOSHIROI SERIES」で国内外から高い評価を獲得し、精密な造形技術と独創的な企画力を強みに事業を展開する。

――「OMOSHIROI BLOCK」を開発されたきっかけを教えてください。

創業以来、当社は建築模型の制作をメイン事業とし、『TVチャンピオン／建築模型王選手権』（テレビ東京系列）優勝など確かな実績を築いてきました。建築模型は高度な専門技術を用いて依頼者の想いをカタチにし、展示を通じて多くの方にご覧いただく受注生産の作品です。そこで私たちは、「もっと多くの人に“OMOSHIROI”を届けたい」という思いを抱き、「独創的な企画力」「多彩な表現手法を駆使するデザイン力」「緻密なものづくり」という強みを掛け合わせたプロダクトを考えた末に、“OMOSHIROI”をかたちにする商品として企画しました。

――企画から商品化まで、どのようなご苦労がありましたか?

開発当初は、百科事典のようにメモパッド一枚一枚に多様な情報を表現できないかという構想からスタートしました。そこから日常向きのペーパーアートを試作する中で、現在の「OMOSHIROI BLOCK」につながる原型が少しずつ形を帯びていきました。しかし、アイデアを商品として成立させるまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。表現の可能性を探りながら数えきれないほどの試作を重ね、構造や強度、加工精度など多くの課題に向き合いました。実用新案登録から特許取得に至るまでの検証にも時間を要し、企画から発売までに5年という長い歳月が必要でした。

――現在、販売されている「OMOSHIROI SERIES」の商品ラインナップを教えてください。

使い終えると精巧な立体ペーパーアートへと姿を変えるメモ帳「BLOCK」のほか、暦としてだけでなく、めくるたびに造形が現れるアートとして楽しめる「CALENDAR」、メッセージカードや結婚式の席次表などさまざまな用途でご使用いただける「FLAT」、彫刻した花びらをかたどった「PETALS」など各ブランドを展開しており、シリーズ合計で約65商品を発売しています。いずれのブランドも、オーダーメイド、カスタマイズのご要望を承っており、世界各地からのご依頼・ご注文に対応しています。

――商品に使用されている「紙」のこだわりを教えてください。

メモとしての実用性と、誰もが安心して使える安全性の両立を大切にしています。お子さまから大人の方まで、年齢や国籍に拘らず扱いやすいよう、薄すぎず引き抜きやすい最適な厚みを選定しました。また、手に触れた瞬間に心地よさを感じられる質感や、日本製のペーパーアートならではの色合い・風合いにもこだわり、数多くの候補から厳選した紙を使用しています。

――モチーフはどのような選定基準で選ばれていますか?

最初のモチーフは、日本建築の構造美を象徴する清水寺の本堂でした。建築模型で培った視点を活かし、私たちは“技術が結集された美しいもの”を基準にモチーフを選んでいます。日本や世界の名建築、豊かな景観、楽器のように精巧な構造をもつものなど、造形としての魅力と物語性を兼ね備えたものを軸に選定しています。

――「OMOSHIROI BLOCK」は、主にどのような方が購入されていますか?

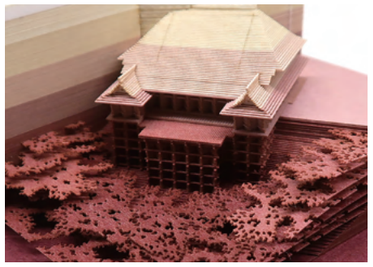
自社オンラインストアでは、日本国内はもちろん、海外から約50カ国のお客さまにご購入いただいています。また、京都・東山エリアの実店舗には多くの観光客がご来店され、ご自身の旅の思い出として、あるいは大切な方へのギフトとして選ばれる方が多くいらっしゃいます。手のひらやポストカードのサイズに凝縮された建築物や景観の緻密な造形に国内外の多くのお客さまが驚かれ、「飾った状態のものも販売してほしい」「オリジナルモチーフを作れますか」「自分のアートコレクションの中心に置きたい」など、嬉しいお声をいただいています。日本らしさと精巧なものづくりが詰まったプロダクトとして、幅広い層のお客さまにご好評いただいています。

――今後の抱負をお聞かせください。

新商品として、世界遺産シリーズを展開していく予定です。これからも真心のこもった商品をお届けすることを大切にして、世界中のより多くの方にワクワクと驚きを楽しんでいただきたいと思っています。

OMOSHIROI BLOCK（SHAPE） Osaka Castle

OMOSHIROI BLOCK（SCENERY） 浅草


OMOSHIROI BLOCK（SHAPE） Kyoto -華（HANA）-

OMOSHIROI BLOCK（SCENERY） 富士山と桜

OMOSHIROI BLOCK（SHAPE） Heart Bouquet -Red-

OMOSHIROI BLOCK（SCENE） Nishikigoi

さまざまな用途に使える『OMOSHIROI SERIES』

OMOSHIROI PETALS

折り畳んだ「花びら」に繊細な彫刻を施したメッセージカード。一片の花びらを切り離して広げると、5枚の花びらのついた花が開き、メッセージやイラストを書くことができる。

OMOSHIROI PETALS
Sakura -Kyoto-

OMOSHIROI FLAT

贈り物に添えるメッセージカード、結婚式などでの席次表のほか、プライスカード、POP、栞など、さまざまな用途に使用可能。二つ折りにすると名刺サイズになり、ビジネスシーンでの印象付けにも活用できる。

OMOSHIROI FLAT
Seasons

OMOSHIROI CALENDAR

めくるごとに世界の観光名所等が現れ、世界旅行の気分を味わえる「DAILY」のほか、使用後に写真やポストカードを挿入するとフォトフレームになる「WEEKLY」、紙にバラの香り付けがされている「MONTHLY」の3種類がある。

OMOSHIROI CALENDAR
（DAILY） World Travel -Blue-

INFORMATION

株式会社トライアード

We Design -OMOSHIROI- TRIAD

住所　：大阪市西淀川区御幣島2-18-25
コーポレートサイト：https://www.triad-japan.com/
オンラインストア　：https://www.omoshiroi-onlinestore.com/

※「OMOSHIROI BLOCK」ならびに「OMOSHIROI」は株式会社トライアードの登録商標です。
（日本、EU26ヶ国、オーストラリア、イギリス、シンガポール、アメリカ、中国、インド、カナダ、台湾、香港、マカオ）
※本製品は特許第6628631号に基づき製造されています。

最新情報は
各SNSにて
ご確認ください

コーポレートサイト　オンラインストア　インスタグラム　X　Youtube

京都にある直営店でも購入可能

OMOSHIROI屋

TEL　：075-600-9311
定休日：水曜
HP　：https://omoshiroi-ya.co.jp/

［本店（写真：上）］
京都市東山区
星野町88-2

［八坂通店（写真：下）］
京都市東山区
清水3-346

「手紙」は語る

人間は表現する動物だというが、
手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。
手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

植村鞆音

第四十四回　杉野 直道

わたしは、テレビ東京に四十一年間在職し、たしか六人の社長に仕えたが、いちばん親しくつき合っていただいたのは杉野直道さんである。日経新聞の専務で次の社長の有力候補の一人といわれた杉野さんがテレビ東京の社長に着任されたのは平成元年のことだった。わたしは一介のプロパー社員でとくに新しい社長の人事に関心はなかったが、杉野さんが社長として最初に着手されたのは長期経営計画で、わたしはそれを作成するため新設された社長室のスタッフとしてこれまでとは違うことを学ぶことになった。開業以来ほぼ一貫して番組表を作る編成というセクションに身を置いたわたしは、狭い意味での経営に直接触れたことがなかったが、ここで初めてテレビ業界の将来のことや売上げのことなどに触れて目を開く。「編成」の定義に「経営の意志の表現」という言葉があるのは知ってはいたが、それを身をもって体験することとなった。

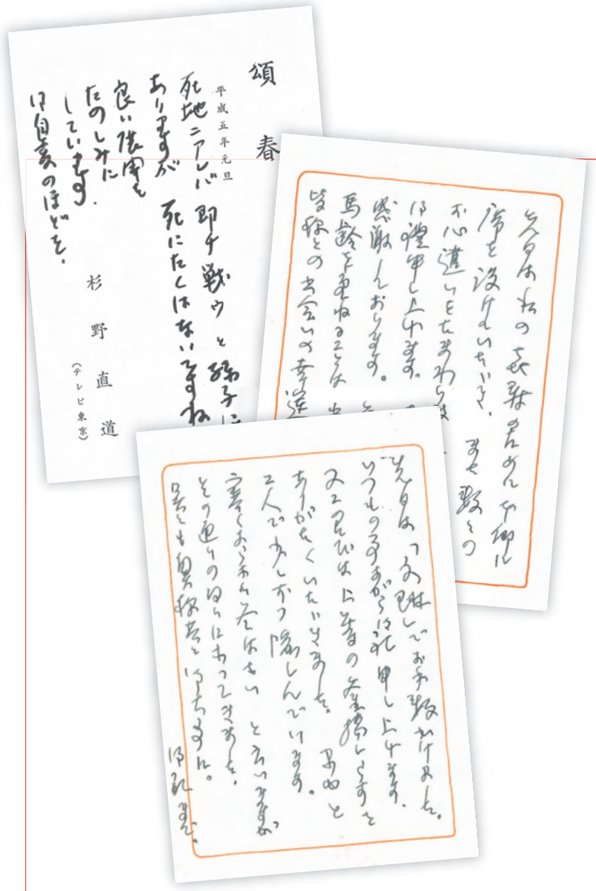
ほぼ三十年以上も前のことなのでまだＩＴ化は視野に入ってはいなかったが、ＢＳ、ＣＳを含む「多メディア多チャンネル」時代が到来するというので、われわれスタッフはそのことを念頭に地上波テレビの将来を議論したものだ。ニューヨーク特派員、「日経ビジネス」編集長、「日経産業新聞」編集長を経験された杉野さんは情報量が多く、偏った映像人間であるスタッフはたくさんのことを教わった。「個性化」の二言は「多メディア多チャンネル時代」の重要なキーワードであったが、それも杉野さんから学んだ。昨今、あらゆるメディアが「受け狙い」のほぼ同じ方向を向いているのを見るにつけ、別の道を見つければいいのにと思ったりする。

わたしは歴史家であった父からいわず語らずに、「権力にたいする反抗心」の大切さを教わったので、社長に対して媚びたり諂ったりすることはできるだけ避けて生きてきたつもりだが、八歳の年齢差と役職の違いこそあれ、杉野さんにはその必要もなかった。偉ぶることもなかったし、だれに対しても分け隔てはなかった。わたしは、政財界のつき合いはほとんどなく、文士やクリエーターなどとのつき合いが主だったが、彼らとの席を設けると杉野さんは喜んで参加され、かなり突っこんだ専門的な質問などもされていた。

社長だった五年間もその後の会長だった期間も、テレビ東京を引退されてからも、亡くなる平成二十七年までのほぼ三十年間、初めの頃と一貫して同じおつき合いが続いた。手紙は、たくさん頂戴していると思っていたが、探して数えてみると年賀状を含め十数通しか残っていない。

いちばん古いのが、平成五年の年賀状。「頌春」の添え書きに、

「死地ニアレバ即チ戦ウと孫子にありますが、死にたくはないですね。良い展開をたのしみにしています。御自愛のほどを。」とある。平成五年といえば、わたしが編成局長をやっていた頃で、視聴率で苦労していたのかもしれない。「死地ニアレバ」とはそのことをいわれたのだろう。たかが視聴率、「死地」などという意識はまるでなかった。敬愛する杉野さんの部下としてわたしは仕事の自由とよろこびを謳歌した。



「先日は私の喜寿のために本郷に席を設けていただき、また数々のお心遣いをたまわりましたこと、厚く御礼申し上げます。家内も心より感謝しております。午年生まれで馬齢を重ねることは当然ながら、皆様との出会いの幸運を味わっております」。

この葉書の日付は平成七年十一月となっている。わたしはこの頃、同年配の仲間数人を誘って飲み会をやっていた。杉野さんを囲む会である。記憶は定かでないが、その会で杉野ご夫妻を囲んで喜寿を祝う会を開催したのだろう。会場は杉野さんお気に入りの池之端「鳥栄」だったと思われる。文面から察すると、奥さまもお招きして喜んでいただいた。この喜寿のお祝いだったか、その後の傘寿の会だったか、お返しに頂戴した黄楊の櫛がわたしの禿頭にはなんの役にもたたず、いまも鏡台の棚の片隅に眠っている。

もう一葉。平成八年の葉書。

「先日は『文琳』でお手数かけました。いつもの事ながら御礼申し上げます。又このたびは上等のしらすありがとうございました。寒くならない冬はないと云いますがその通りの日々になってきました。呉々も奥様共々御大切に。御礼まで」。

当時神泉にあった「文琳」は河田吉功さんの中華料理店でわたしはよく通った。値段はリーズナブルで料理は旨かった。杉野さんが「みゆ」と呼ばれる美由起夫人も引っぱり出してわれわれは家族がらみでよく会食を楽しんだ。いいたいことをいい合い、共に生きる喜びを満喫した。

「『直木三十五伝』をうれしく拝受しました。大変興味深く読んでいます。貴兄の御身内と思えば他人事ではない気がします。一寸肩の荷をおろした気持ちでしょう。これからも楽しく長生きして下さい。お礼まで」。

『直木三十五伝』は、サラリーマン退職後著述業を目指したわたしが初めて書いた伯父、直木三十五の評伝。畝本に応えた杉野さんからの礼状である。杉野さんは書道や写真などの趣味をお持ちだったらしく、頂戴した当時は気づかなかったが、いま改めて見てみるとなるほどそれらしい筆跡である。評伝の上梓は平成十七年六月で、出版記念会は、「直木賞」にあやかって東京会館で開いた。丸谷才一さん、城山三郎さん、永井路子さん、などにも出席していただき賑やかだった。杉野さんにもスピーチをいただいた。緊張していたわたしは、その内容をよく覚えていないが、たしか、「植村くんは未知なところがたくさんある。ひょっとすると、これから大作家になるかもしれない」という主旨の発言だったように思う。

意に反し、その後も鳴かず飛ばずの日々を送るわたしだが、杉野さんとの親密なおつき合いは、八十五歳で亡くなるまで続いた。最後に仲間うちで会食したのは、ご自宅に近い吉祥寺の地中海料理屋だった。新しいスーツに身を包まれた杉野さんは、それまでと同じように軽口を叩かれていた。

「諸兄と顔を会わせるのが楽しみになりました」。

最後に頂戴した年賀状には添え書きにこう書かれている。毛筆でご自身の姓名と「みゆ」の名前を添えて。

著者略歴
植村鞆音（うえむらともね）　エッセイスト
小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、（株）テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2006年受賞『直木三十五伝』（https://www.rsl.waikei.jp/prize01.html）で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

杉野 直道

実業家
1930-2015

1930年、福岡県出身。東京大学法学部を卒業後、1953年に日本経済新聞社に入社。1969年『日経ビジネス』創刊やデータバンク設立など、日経新聞の中核事業の立ち上げに携わる。1989年にテレビ東京社長、1996年に会長を務めた。2015年、急性肝不全により85歳で逝去。

持続可能な社会の実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーの循環・再生は、現代社会が向き合うべき最優先課題です。KPPグループは「循環型社会の実現に貢献する」をミッションに掲げ、事業を通じた持続可能な社会づくりと企業価値の向上に邁進しています。その象徴的な取り組みとして、今号では環境配慮型素材の可能性を拓く、紙製人工芝「ペーパーターフ®」と、独自素材「かみのいとOJO+」に関する最新のトピックスをお届けします。

01 マイクロプラスチック流出を抑制する屋外向け紙製人工芝「ペーパーターフ®」を開発

ペーパーターフ paper turf®

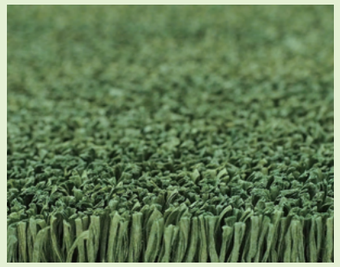
当社グループの王子ファイバー株式会社は、人工芝のパイル（葉部分）に紙素材を採用した屋外向け「ペーパーターフ®」を新たに開発いたしました。本製品は、2026年4月より国際紙パルプ商事にて販売を開始しております。

近年、人工芝の摩耗によるマイクロプラスチックの海洋流出が環境課題となっていますが、本製品は紙特有の高い生分解性を備えており、流出時も生態系への影響を最小限に抑えることができます。

「ペーパーターフ®」は用途に合わせ、天然由来の充填剤と併用可能な「ロングパイル」と、優れた防炎性能を持つ「ショートタイプ」の2種を展開。公共施設や商業モール、オフィス環境など、サステナビリティが求められる現代の景観設計に最適なソリューションを提供します。

ロングパイルタイプ

天然芝に近い柔らかな風合いを追求し、公園や子供用広場など、自然との調和が求められる空間に最適です。パイルだけでなく、併用する充填剤にも天然素材を推奨しています。



ショートパイルタイプ

パイルを高密度に植え込む独自技術（特許取得済み）により、防炎剤を使用することなく高い防炎性能を実現しました。屋上やベランダ、半屋外空間でも安心してお使いいただけます。

02 プロ野球選手が使用した木製バットを「かみのいとOJO+」にリサイクル

王子ファイバー株式会社は、ミズノ株式会社、キュアラボ株式会社、および王子エフテックス株式会社と協業し、プロ野球選手が使用した木製バットをリサイクルした画期的な「紙糸素材」を開発いたしました。本素材を採用した野球バッグは、今後ミズノ契約のトップチーム向けに提供される予定です。

プロ野球の現場では、日々折れたバットや、製造過程で不適合となった木材が発生します。これらに新たな命を吹き込むため、当社の「かみのいとOJO+」をベースに、木材粉末を一部配合する独自技術を確立。紙ならではの「異素材を抄き込める」特性を活かし、協業各社の高度な繊維化・紡績技術を融合させることで、環境負荷低減とスポーツ文化の継承を両立する新素材が誕生しました。

本素材は、資源の有効活用だけでなく、紙糸特有の軽さや機能性も兼ね備えています。トップアスリートを支えるミズノの製品を通じて、循環型社会への貢献を具現化します。

03 石川県小松市に「ペーパーターフ®」生産の重要拠点となる「小松撚糸工場」が竣工

2026年2月6日、石川県小松市において「小松撚糸工場」の竣工式を執り行いました。本工場は、2026年4月に発売を予定している屋外向け紙製人工芝「ペーパーターフ®」製造の心臓部となる「撚糸（ねんし）」工程を担う重要拠点です。

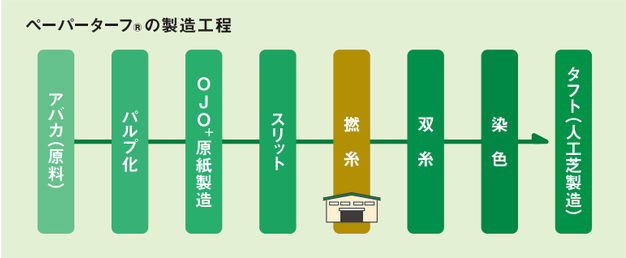
「ペーパーターフ®」の開発における最大の鍵は、屋外利用に耐えうる「糸の強度」の確保でした。本工場では、独自に開発した新たな撚糸技法を導入し、この課題を克服。さらに、地元の老舗企業である株式会社酒井商店とOEM契約を締結し、同社の卓越した技術力のもとで生産工程を集約しました。新工場の生産能力は、2026年度に年間2万5,000平方メートル（製品換算）を見込んでおり、今後は需要動向に合わせて段階的な増産を計画しています。

竣工式には、小松市の宮橋勝栄市長をはじめとする市役所関係者、および多くの取引先様にご臨席いただきました。式典は厳粛な神事に始まり、来賓祝辞、テープカット、最新の撚糸機による稼働披露が行われ、新工場の門出を華やかに祝しました。

KPPグループは本製品の市場拡大を図るとともに、紙および紙糸の可能性を追求し、持続可能な社会の実現に貢献してまいります。

左から、国際紙パルプ商事株式会社 アドバイザー 白石弘之、KPPグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 田辺円、小松市長 宮橋勝栄様、王子エフテックス株式会社 商品開発本部 商品開発部 部長 山田英明様、王子ファイバー株式会社 代表取締役社長 平井雅一

※社名・役職名は撮影当時のものです



編集後記

本誌の特集を決めていくときに肝としているのは、「見たことがない」という新鮮な受け止めがあるかどうかです。読者の皆さまにそう思っていただくには、我々編集部が好奇心を持ち、その魅力を伝える必要があると考えています。

切り絵を特集にしていることは何度もありますが、今回の特集・斉藤弘樹さんの作品に感じた意外性は、普遍的なモチーフを扱っていることでした。奇跡的な瞬間やおとぎ話を描くのではなく、「いつもの光景が切り絵を通して特別になる」という作風に魅力を感じてのことです。

斉藤さんは高校の授業で切り絵に出会い、カッターを手にした時に「これだ」という感覚があったと仰っていました。たった一度の機会がその後の人生の道を大きく拓いていったということになりますが、TSUNAGUもまた紙を通した「拓き」の瞬間を読者の皆さまと共有できる機会そのものであり、制作の重要性を改めて実感しているところです。

紙の過去から未来は、人々の生活様式に合わせて様々に続いていきます。古来より数多の定理や思想が書物によって語り継がれ、明かりを灯してきたように、紙と文化は常に共にあるものです。そんな時代を超えて受け継がれてきた紙文化を紐解く新企画「紙の綴（かみのつづり）」がスタートします。デジタルな情報の波から少し距離を置いて、当たり前にある紙の奥に潜む静寂に浸ってみませんか。

（加藤智香）

暮らしや文化に寄り添う
「紙」の価値を見つめ直す

紐解く

Vol. 00

予告

Title 次号より新企画がスタート

「紙の綴（つづり）」

いつの時代も、私たちの暮らしと文化は、「紙」によって綴られてきました。

紙は、紀元前2世紀に誕生し、長い歴史の中で人々の暮らしに寄り添い、文化や産業の発展を支えてきました。朝、新聞を広げる音。買い物帰りに手にする紙袋。誰かに宛てた小さなメモ。紙は、特別なものではなく、日々の営みの中で静かにその役割を果たしながら、私たちの生活を形づくってきました。情報を記録し、思いを届け、生活の場を整える。その役割は時代とともに形を変えながらも、私たちの身近なところで確かな存在感を放ち続けています。

デジタル化やＡＩ技術が進展し、ペーパーレス化が進む現代においても、紙の価値は揺らぐことなく、むしろ新たな価値が高まりつつあります。質感や手触りがもたらす安心感、情報を受け取る体験としての豊かさ、そして加工技術の進化によって生まれる新しい用途。紙はこれからも人々の暮らしとともに歩み、未来の社会に新たな価値をもたらしていく存在なのです。

次号からスタートする新企画「紙の綴（つづり）」では、毎号ひとつの紙製品を取り上げ、私たちの生活にどのような豊かさをもたらしてきたのか、またどのように形を変え、未来にどのような可能性があるのかを多角的に紹介していきます。伝統と革新、感性と技術、そして環境への配慮——紙という素材が持つ多層的な魅力を、私たちの暮らしに結びつけながら丁寧に紐解いていきます。どうぞご期待ください。

KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.

発行：グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044　東京都中央区明石町6番24号
TEL（03）3542-4166（代）
https://www.kpp-gr.com/

TSUNAGU公式インスタグラム
ID：kpp.tsunagu
ぜひフォローをお願いいたします!

RICE INK®
輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

Eco・Press Binder
針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

「TSUNAGU」Vol. 66 使用紙：雷鳥マットコートZ（127.9g/㎡・中越パルプ工業株式会社）しなやかな手触りと優れた可読性を持ち、印刷面のグロス感も抜群なマットコート紙です。